

2025年度卒業生動向調査（2025年3月卒業）

調査目的： 卒業生を対象に学修満足度、在学中に修得した汎用的能力、および現在のキャリア状況に関する追跡調査を実施し、その実態を多角的に把握・分析したものである。得られた客観的エビデンスを教育課程(カリキュラム)の改善に反映させることで、教育の質保証と、社会の要請に応える人材の育成に向けた検討資料として活用する。

対象者：2025年3月に亀田医療大学を卒業した臨床経験1年目の
看護師 74 名

調査期間と方法：
2026年4月21日から5月12日
質問紙調査／インターネットによる回答

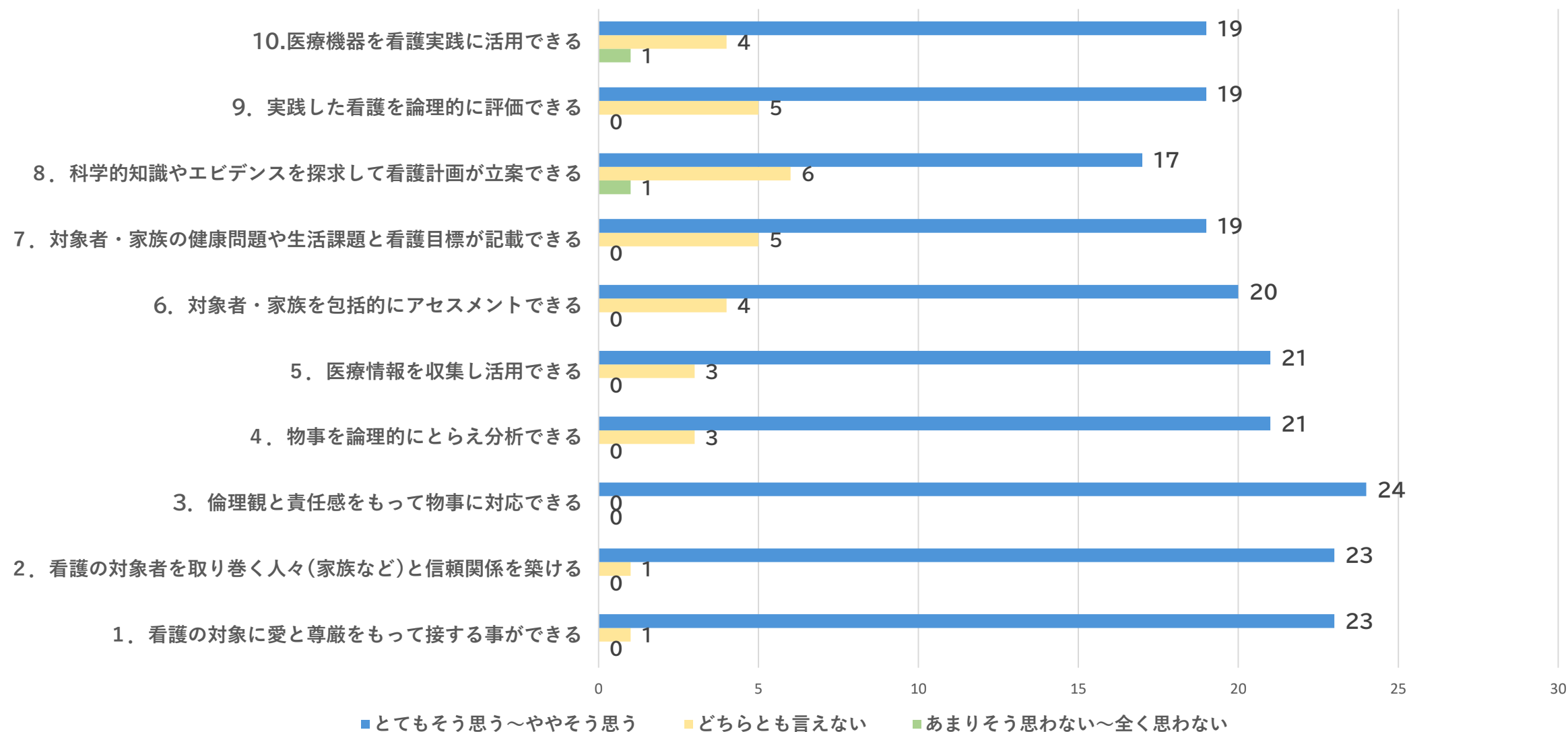
回答者数：24名(32.0%)

結果

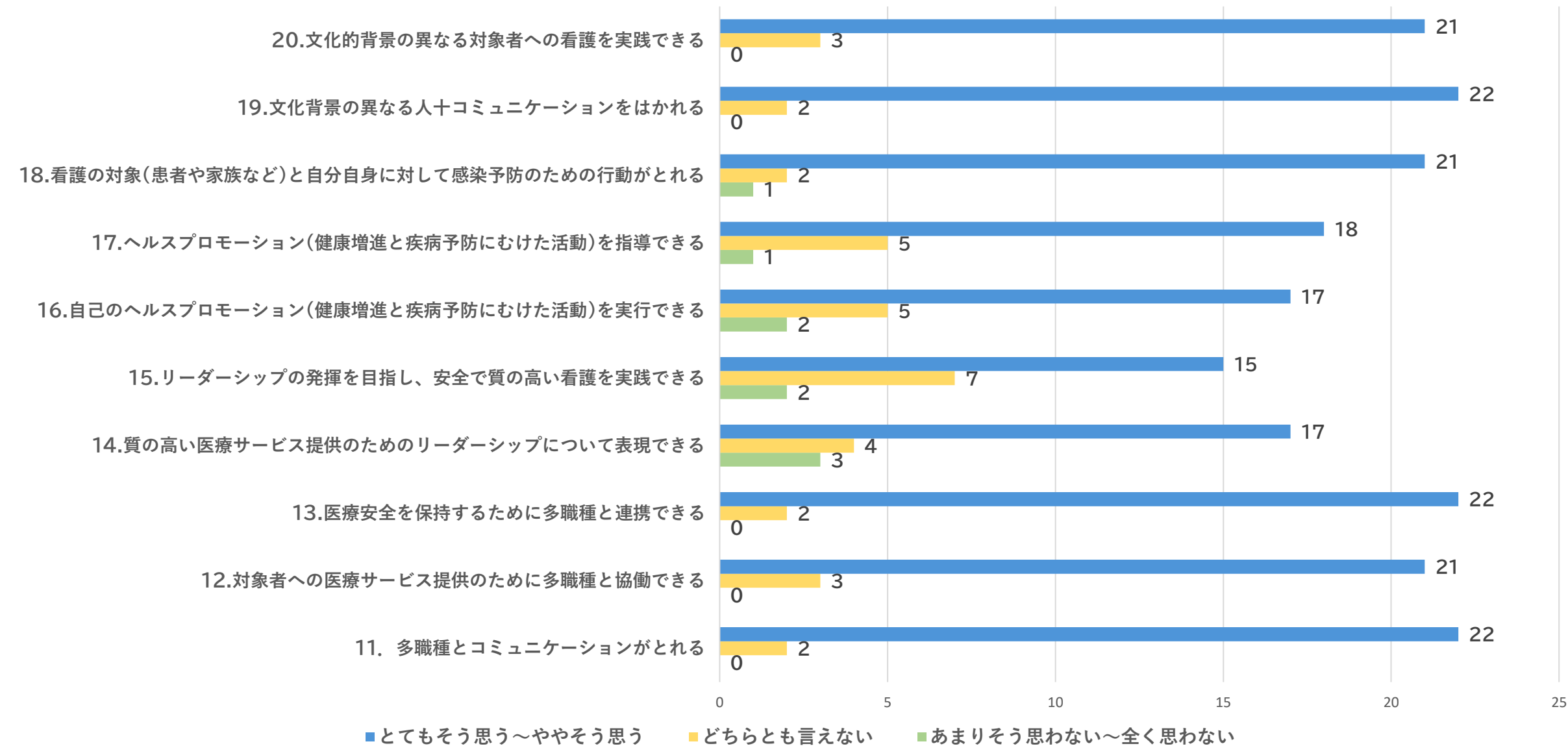
対象者の属性

移住地	千葉県内(23名)	千葉県外(1名)
性別	男性 (4名)	女性 (20名)
職種	看護師 (23名)	保健師 (1名)
勤務先	病院 (23名)	行政機関 (1 名)
転職経験	あり (0 名)	なし (24名)

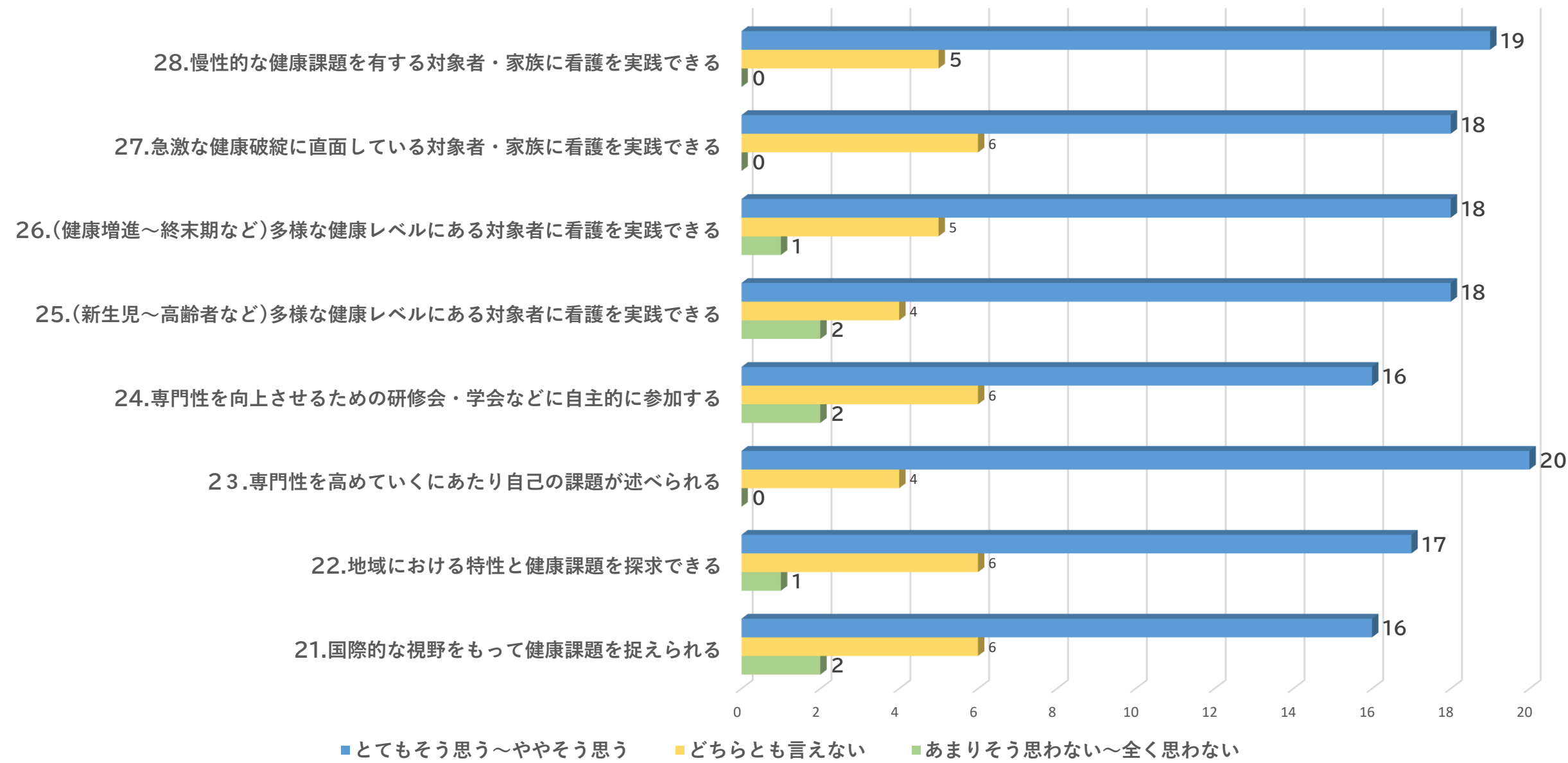
スキル（実践能力）の必要度：発揮できているか（教育目標1～10）



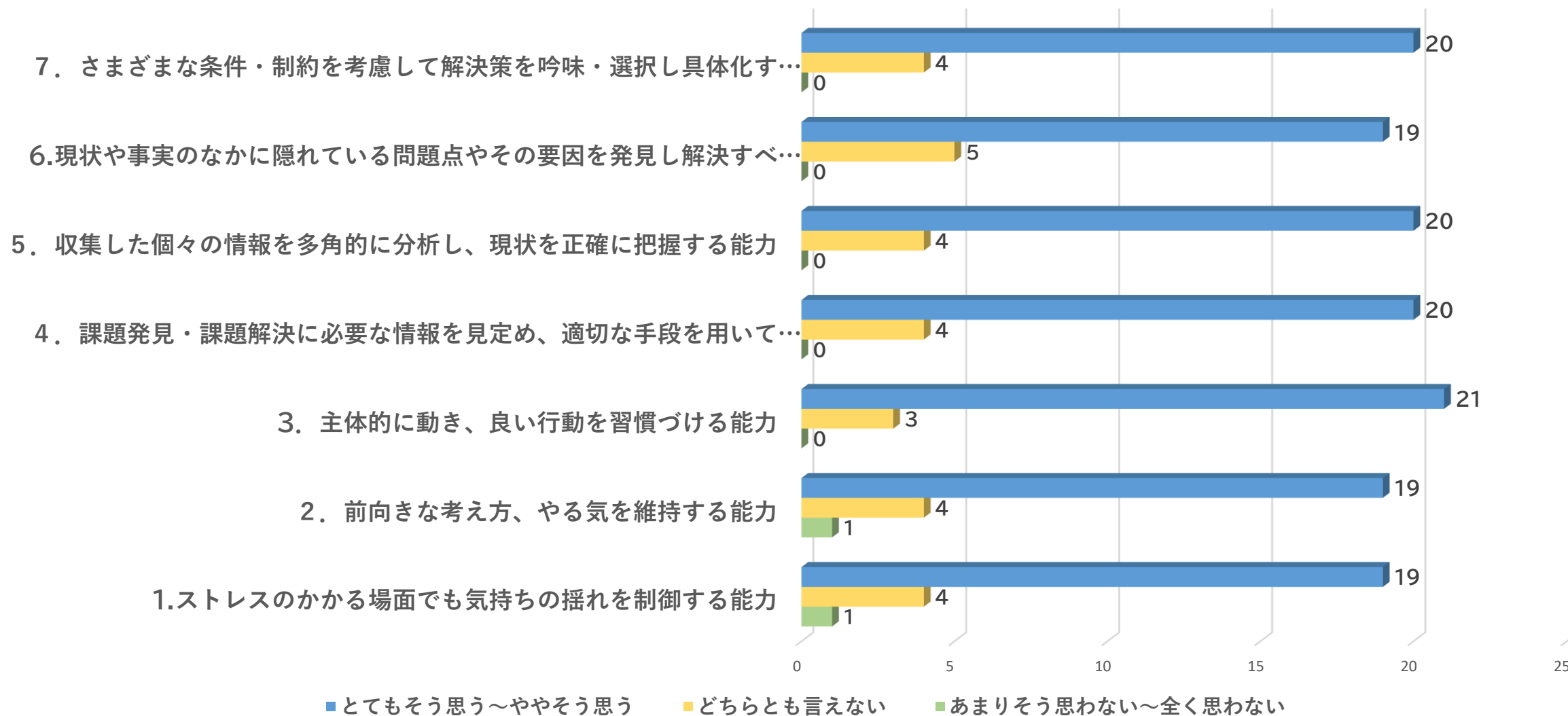
スキル(実践能力)の必要度:発揮できているか(教育目標11~20)



スキル（実践能力）の必要度：発揮できているか（教育目標21～28）

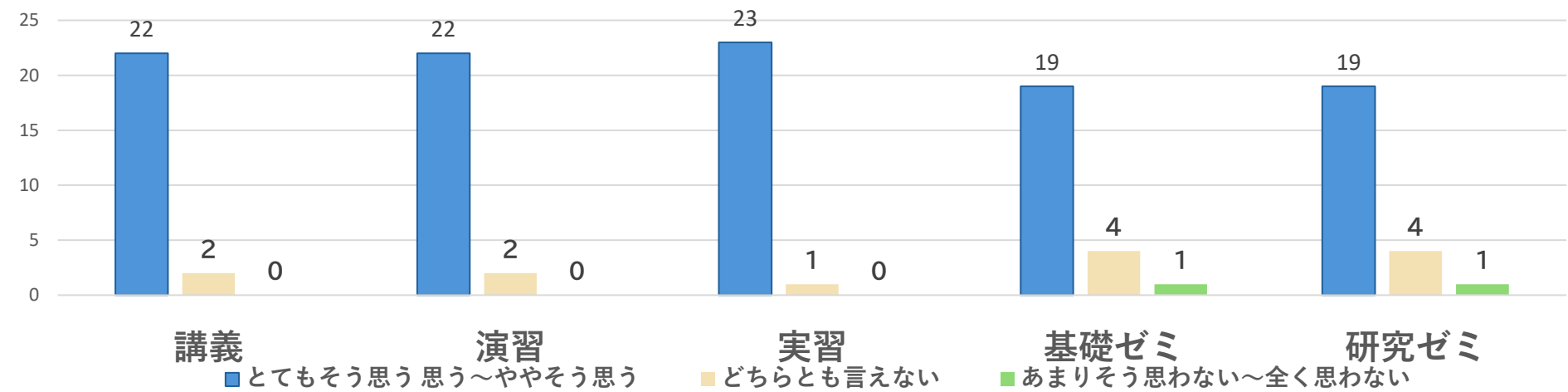


スキル（実践能力）の必要度：発揮できているか

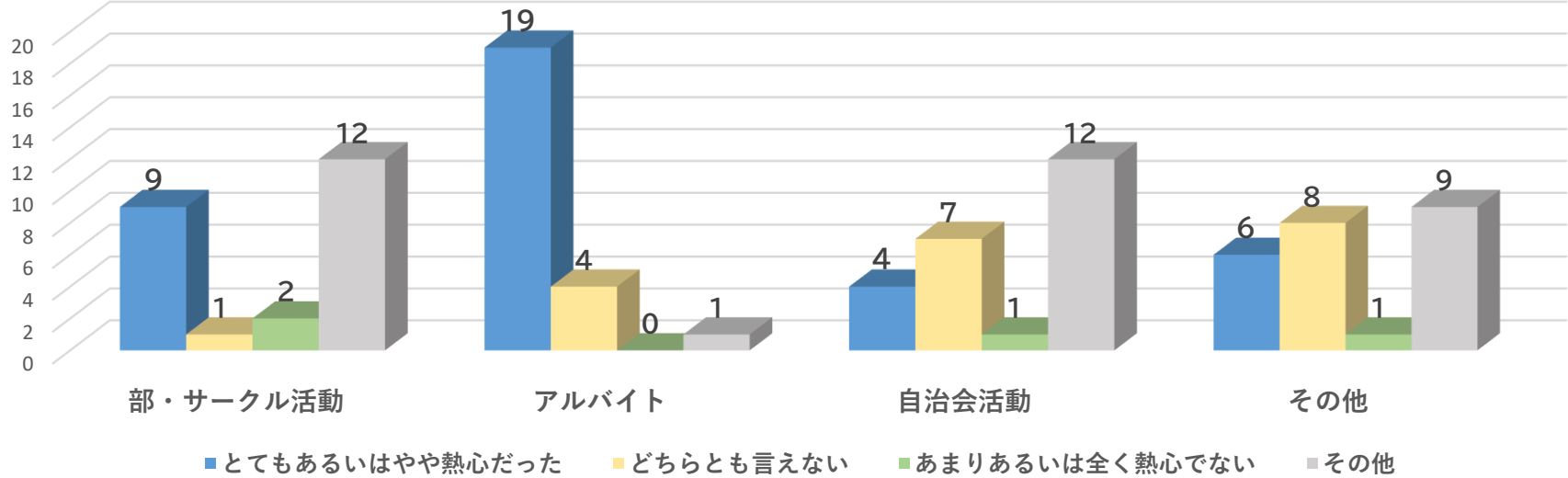


学生時代の取り組み

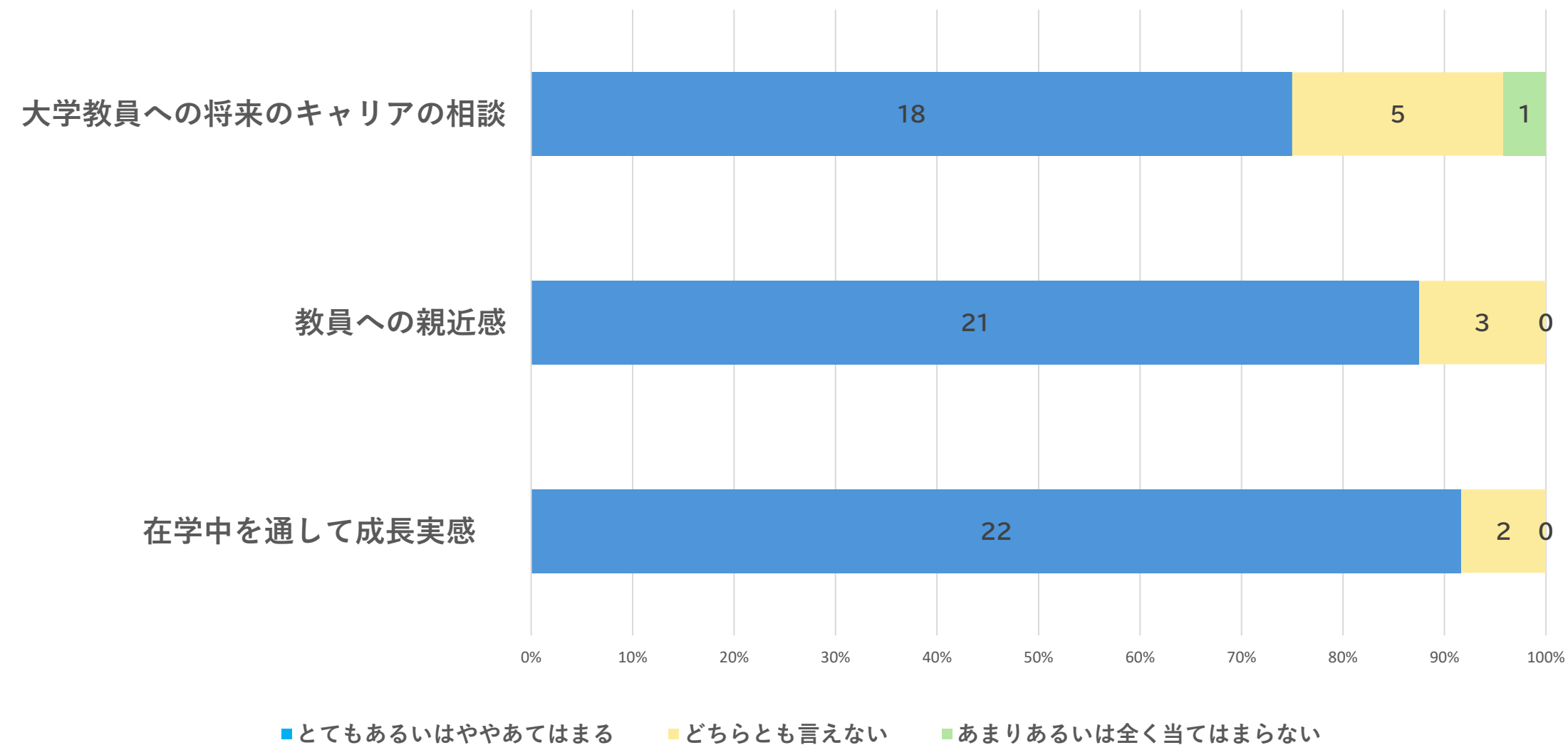
講義・演習・実習



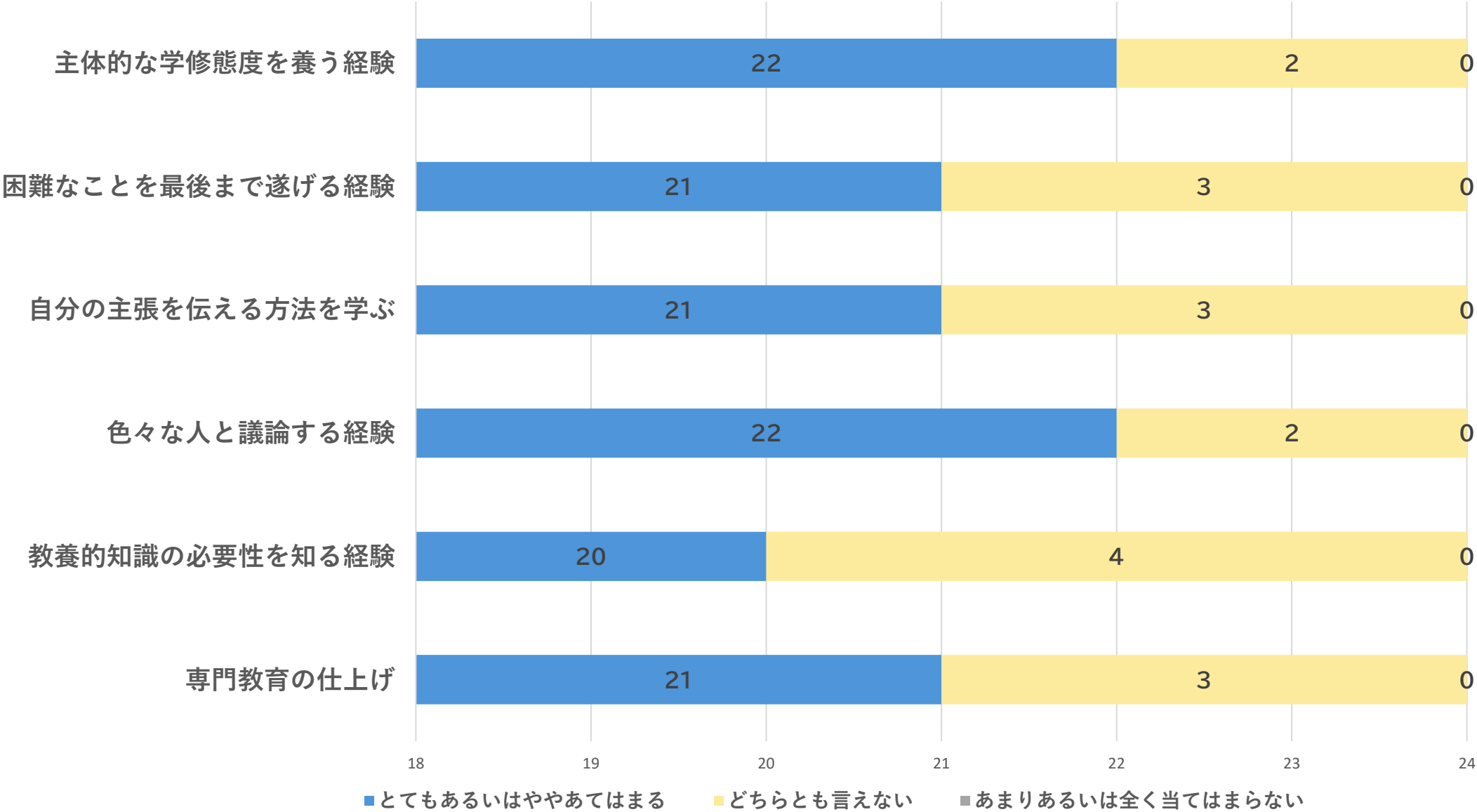
部・サークル、自治会、アルバイト等



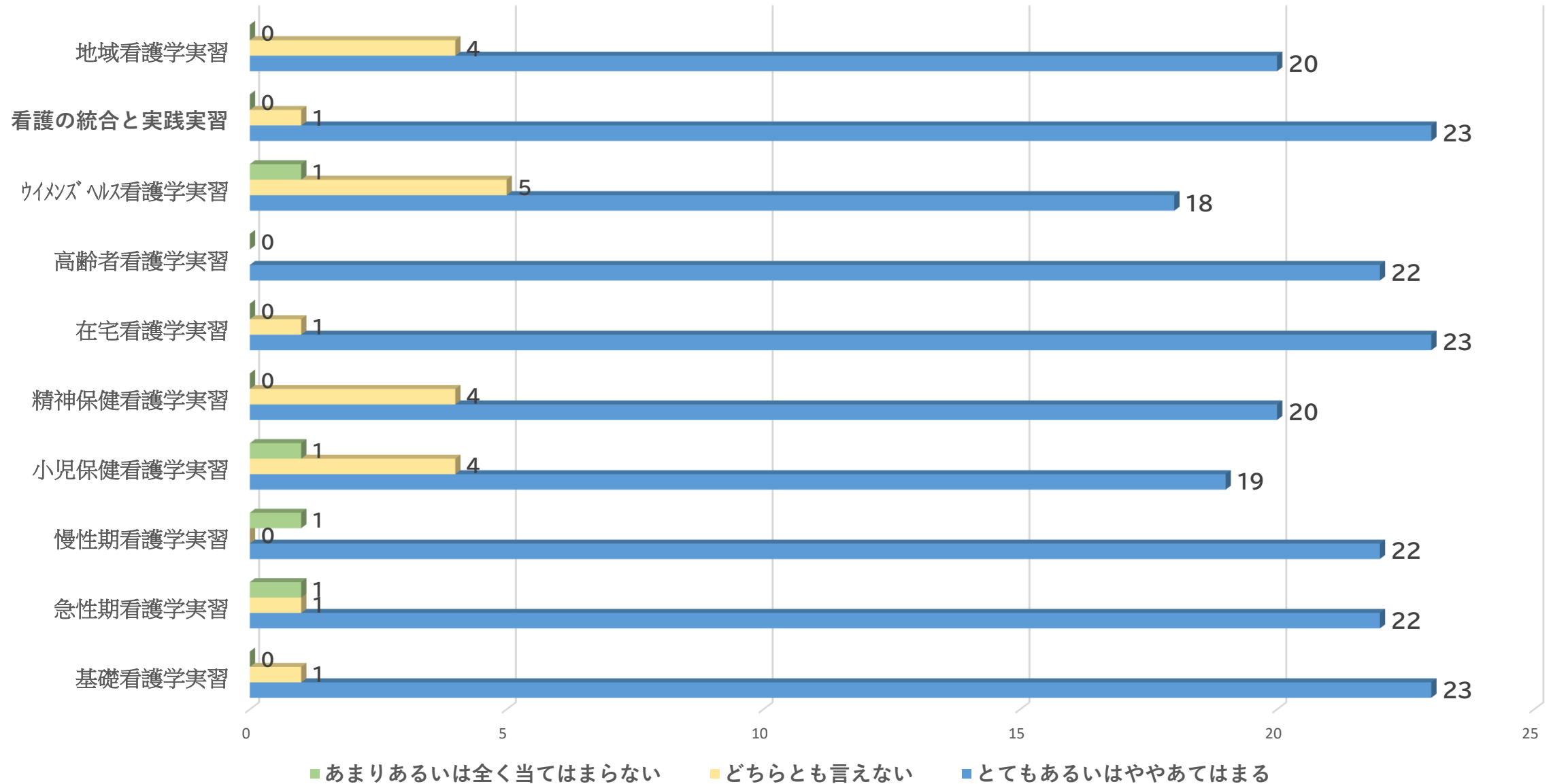
大学時代の成長実感など



研究ゼミナールの意義



看護学臨地実習の意義

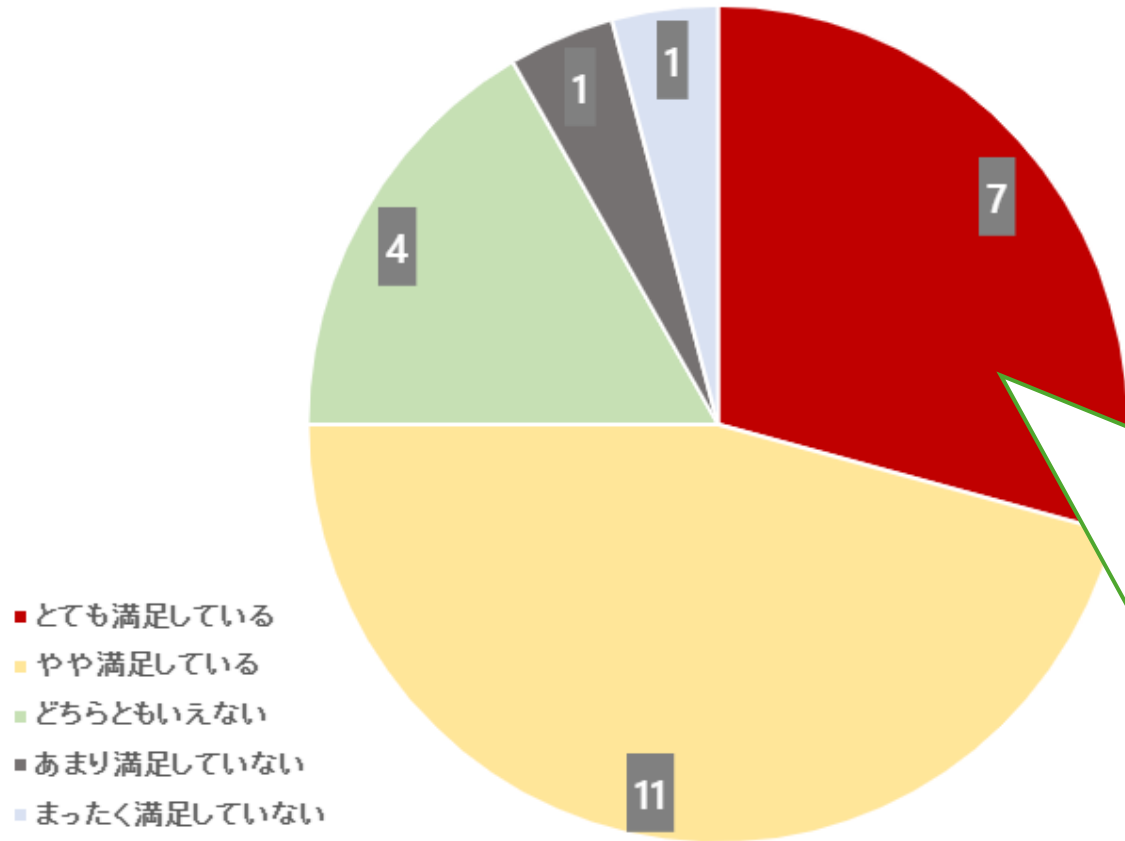


本学のイメージ

(複数回答)

内 容	2024年卒	2025年卒
伝統・実績がある	1	4
教育内容が充実している	11	8
教育内容のレベルが高い	2	3
研究内容に力を入れている	3	3
社会で役立つ力が身につく	5	7
グローバル教育が充実している	3	3
学修設備や環境が充実している	4	6
地域連携に力を入れている	6	10
産官学連携に力を入れている	0	1
社会貢献活動に力を入れている	0	1
スポーツに力を入れている	0	1
大学全体の教育方針が明確である	4	3
各学部の教育方針が明確である	1	2
学生に活気がある	2	2
就職支援が充実している	8	4
特になし	2	2

大学に対しての満足度



1. 教員がとても優しく最後までサポートしてくれた。
2. 勉強できる空間だった。
3. ゆとりをもって学習できた。設備がよかった。
4. 実習施設が充実していた。
5. 最後まで学生に対して熱心に看護について教えて下さったこと。
6. みんなでワイワイできたところ。
7. 職場で役立っている知識があるから。
8. 学生と教員の距離が近く勉強のことや進路のことを相談しやすかった。
9. 亀田総合病院で実習できたこと。
10. 教員の皆様も親身になった下さり楽しく学べる環境だった。

大学に対しての推奨度

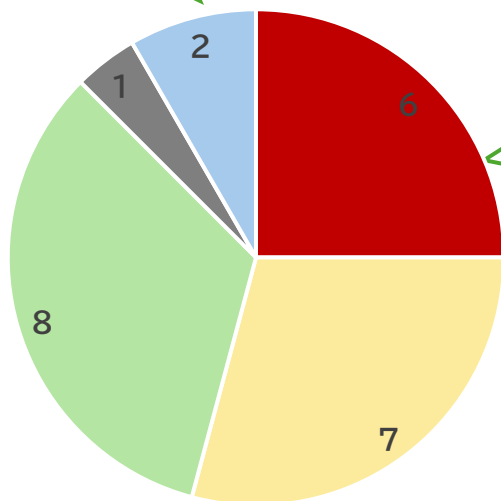
あまり推奨できない理由

- 周囲に商業施設がないため環境としてお勧めできない。
- 病院が良いからと聞いて来たけど給料が仕事量と合ってなく勧められない。
- 設備はよいが利便性がわるいため勧めない。
- 学費を払っているのに、放課後使えない部屋があり、エレベーターが1つしか使えない。

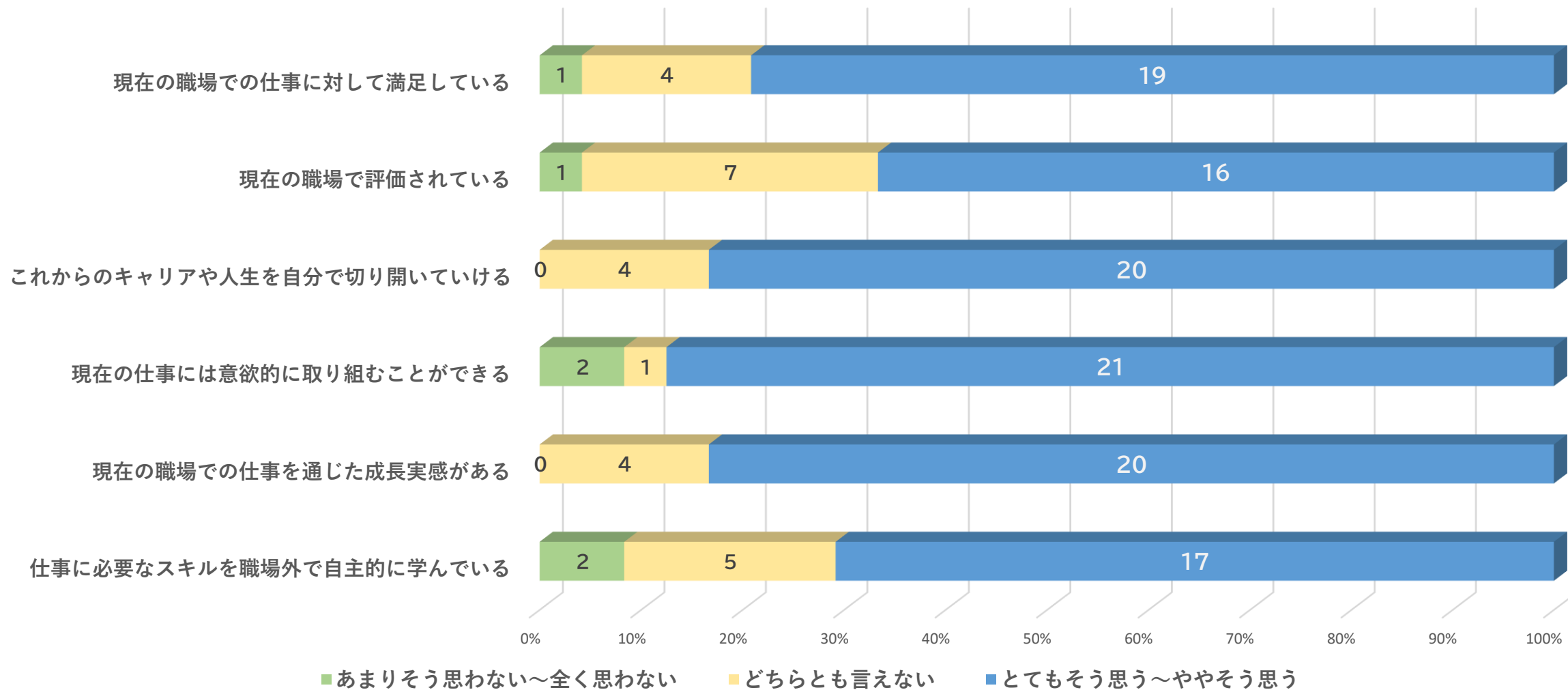
推奨したい理由

- 実習や試験など大事なところで厳しいところや愛あるところが良かった。
- 亀田病院と付属していることで実習内容が充実していること。
- 先生は最高だった。親身になってサポートしてくれた。
- 勉強できる空間だった。
- 最後まで熱心に学生に看護について教えて下さったこと。
- 学生と教員の距離が近く勉強のことや進路のことを相談しやすかった。
- ゆとりをもって学習できたことや設備がよかった。
- 教育や支援の手厚いところを勧めたい。
- 看護について熱心に一人ひとりに教えてくれる。
- みんなでワイワイできた面と勉強に集中できる環境がある。
- 高校から大学に医療コースの面で体験できるという点が良い。

- とても勧めたい
- やや勧めたい
- どちらとも言えない
- あまり勧めたくない
- 全く勧めたくない



仕事の満足度とキャリア意識



【卒業生から本学へのメッセージ】

- ① 大学で学んだことは絶対に職場で生かされます。
- ② 実習とは異なることもたくさんあり、何が一番異なるかというとはやはり責任感を持って看護にあたらなければいけないと思います。
- ③ 患者様が気持ちよく退院していくために、入院時からその人の背景をよく考えてアセスメントを行い実践へと繋げていきます。
- ④ とてもやりがいのある仕事で、自身の看護観だけでなく人間性も伸ばせる仕事だこの一年で思いました。
- ⑤ 国家試験が終わるまで一人ひとり熱心に対応してくれるのは、先生方の気持ちが学生に対して真面目に思ってくれていることだと実感しました。
- ⑥ 在学中に様々な経験をして楽しんで下さい。海外研修が今でもとても思い出に残っています。
- ⑦ 新しい学生の誰にでも変わらず対応して下さい。

【卒業生から在校生へのメッセージ】

- ① 楽しんで実習や演習など切り替えるところ切り替えて頑張ってください。
- ② 看護師という道はとても簡単な道ではないですが、めげずに自分のことを信じて、仲間を信じて無理のない程度に頑張ってください。
- ③ 明るく素直が一番です。
- ④ 頑張ってください。
- ⑤ 実習や定期試験などたくさん大変なことがあると思いますが、就職してから必ず役に立つので頑張ってください。
- ⑥ 国家試験に向けての勉強頑張ってください。
- ⑦ 大学で学んだことは絶対に職場で生かされます。実習とは異なることもたくさんあり、何が一番異なるかということやはり責任感をもって看護に当たらなければいけないと思います。
患者様が気持ちよく退院していくために、入院時からその人の背景ををよく考えて、アセスメントを行い実践へとつなげていきます。
- ⑧ とてもやりがいのある仕事、自身の看護観だけではなく人間性も伸ばせる仕事だと、この一年で思いました。

分析

今回のデータは、大学での学びを通じて汎用的能力・経験に関する項目によって学生たちが4年間のカリキュラム(特に卒業期)を通じて、どのような教育的効果を実感したのかが明確になった。

各項目の分析は以下のとおりである。

1. 実践能力の必要度(教育目標1～28)について、どれくらい発揮できているかの回答を得た。その結果、どの項目も18～19名(75%～79%)が、「発揮できていると思う」と回答していた。中でも、「看護の対象に愛と尊厳をもって接することができる」「倫理観と責任をもって物事に対応できる」「多様な年齢層の対象者に看護を実践できる」「健康増進～終末期などの健康レベルにある対象者に看護を実践できる」「急激な健康破綻に直面している対象者・家族に看護を実践できる」「慢性的な健康課題を有する対象者・家族に看護ができる」という項目には75%が肯定的に回答していた。しかし、全体的に「どちらとも言えない」という回答が一定数(16%～25%)存在し、卒業直前の段階として「実際に一人で実践するには、まだ自信まではない」という心理状態が伺えた。
2. 学生時代の取り組みについて、講義、演習、実習、ゼミナールのすべてに熱心に取り組んだと回答したのは(75%～83%)を占めた。特に実習、演習においては、(66.7%)が学びの目的や手応えを明確に捉えていた。また講義も全員が肯定的であり、授業の質や分かりやすさについて一定の評価がなされていた。一方、学業以外で特に熱心に取り組んだ活動としては「アルバイト」が79%と最多であった。これは、アルバイトが社会経験の蓄積や実践的なスキルを磨く場として、学生生活の中で非常に大きなウェイトを占めていた。

一方、経験なしと回答した『自治会活動』は(50%)、『部・サークル活動』も(50%)と同率で補助的・控えめな活動として「どちらとも言えない」または選択的(熱中する人と未経験の人に分かれる)傾向にあった。

3. 教育活動では、私立単科大学ならではの特性や理念を反映し、極めて高い成果を上げていた。具体的には、学生の「成長実感(91.7%)」や「教員への親近感(87.5%)」が非常に高く、在学中に将来のキャリアについて相談していた割合も75.0%に達している。これらの数値は、教員への親近感に加え、学生が能動的に学び、自己の意見を伝える環境が機能していた。さらに、社会での即戦力となる「コミュニケーション力」や「プレゼンテーション力」の育成に繋がっていた。次いで、「教養的知識(83.3%)」と「専門教育の仕上げ(87.5%)」の双方が高い評価を得ており、専門性を体系的に深めるカリキュラムのバランスの良さも評価できた。一方で、「基礎・研究ゼミナール」については、他の項目と比較して中立的・慎重な回答の割合がやや高かった。これは、少人数での議論や主体的な取り組みに対する学生の意識の差、あるいは「担当教員との相性」などが影響し、受講者の間で評価が分かれたものと考えられる。
4. 看護学臨地実習については意義があると回答した者が75%～95.8%であった。特に「看護の統合と実践」「基礎看護学実習」「在宅看護学実習」「成人看護学Ⅰ:急性看護学」「成人看護学Ⅱ:慢性看護学」「在宅看護学実習」「高齢者看護学実習」においては90%以上が意義があると回答していた。実習は意義があると回答した学生が多く、卒業後に看護の実践を行うことで、その必要性を実感していると思われる。しかし、一方で対象者の受け止めの差により(16～21%)が特性(子ども、精神疾患、妊産婦など)への関わり方の難しさや実習施設での経験内容の差も影響していると考えられる。

5. 本学の印象(イメージ)では、強み・特徴として最も多くの支持を集めたのは「地域連携に力を入れている」(16.4%)であり、地域社会への貢献やローカルな活動が高く評価されていた。次いで、教育の質や実践性を評価する声が多く、「教育内容が充実している」(13.1%)「社会で役立つ力が身につく」(11.5%)」が上位を占めていた。さらに、「学修設備や環境が充実している」(9.8%)も高い割合を示し、日々の学びを支えるキャンパス環境への満足度の高さがうかがえる。一方で、「産官学連携」(1.6%)や「社会貢献活動」(1.6%)などは低比率であった。つまり、本学は「地域との結びつき」を核としながら、充実した環境のもとで「社会に直結する実践的な教育」を提供する大学として、強く認識されていた。
6. 本学に対する満足度では、「満足している」と回答した者が18名(75.0%)と高い割合を占めた。主な理由として、教員が親身になってサポートしたことや、最後まで熱心に看護の指導を行ったことが挙げられる。また、「設備が充実している」「勉強に集中しやすい環境である」といった学習環境を評価する声も多かった。これらは、演習・実習における指導体制やチューター制による教員の支援、さらにバランスの取れたカリキュラムが好影響を与えていると考えられる。一方で、「どちらともいえない」と回答した者が4名(16.7%)、「あまり満足していない」と回答した者が2名(8.3%)であった。その理由には、立地の悪さに対する不満のほか、「学費を支払っているにもかかわらず放課後に使えない部屋がある」「利用できるエレベーターが一つしかない」といった、施設運用のルールや利便性に関する課題が指摘された。

7. 大学の推奨度については、「推奨したい」との回答が13名(54.2%)を占めた。その理由として、「K病院で実習ができる」「実習や試験などの要所で、厳しさと愛情のある指導を受けられた」「教育や支援が手厚い」「亀田病院の附属であるため実習内容が充実している」「看護について一人ひとり丁寧に教えてくれる」といった意見が挙げられた。一方、「どちらともいえない」と回答した者は8名(33.3%)であった。その理由には、「周囲に商業施設がなく環境としてあまりおすすめできない」「他に良いところがある」「もっと学べるところがある」「利便性が悪い」といった、主に立地や環境面、選択肢の多さに関する内容が見られた。大学の「満足度(75%)」と比較すると、推奨度とのギャップが大きい。この要因として、看護学部特有のハードな臨床実習や、精神的・肉体的負担の大きさを考慮し、「他者には安易に勧められない」という、他者への配慮の心理が働いているの回答と思われる。

8. 仕事の満足度とキャリア意識については、本人の主観的な就業意欲や将来への展望において極めて高い数値が得られた。具体的には、「現在の仕事に意欲的に取り組んでいる(87.5%)」が最も高く、次いで「現在の職場での仕事を通じた成長実感がある(83.3%)」「これからのキャリアや人生を自分で切り開いていける(83.3%)」の双方が高値となった。一方で、周囲からの客観的な評価に対する認識には課題が見られる。「現在の職場で評価されている」と感じている者は(66.7%)に留まっており、他の項目と比べて肯定的な回答が少なかった。また、「どちらとも言えない」と回答した約3割は、自身の評価に戸惑いや、あるいは慎重に回答している傾向が強いと考えられる。

総括(まとめ)

1. 全体的な傾向

すべての項目において、肯定的な回答が19～21名(80%～87%)を占めており、全体として非常にバランスよく能力が育成されている。ただし、質問項目に一貫して1～2名の「まったくあてはまらない」という強い否定的な回答が見られた。これは回答の二極化を示しており、特定の学生が深い孤立感や不一致、あるいは環境への不適應を起こしている可能性が高い。

2. 自己管理に関する傾向

情報収集や課題解決といった「思考・行動」に関する項目では、否定的な回答は無かった。一方で、ストレス管理などの「精神面・メンタル・体調」に関する項目では、わずかに否定的な回答が見られた。

3. 教育・実習カリキュラムの成果

「自己成長実感」および「主体的な学修態度」がともに(91.7%)と非常に高い。また、実習の集大成である「看護の統合と臨地実習」が(95.8%)のうち「とてもあてはまる」が(約7割)という高い評価を得ている。これは、4年間のカリキュラムが有効かつ強固に機能している。

4. 「満足度」と「推奨度」にギャップが生じる背景

大学の満足度が(75%)であるのに対し、他者への推奨度は(54.2%)にとどまり、「どちらともいえない」が(33.3%)へと急増している。この背景には、「自分自身は成長できて満足したが、看護の学びや実習に伴う心身の負担、およびそのハードさを考慮すると、他者に勧めることには躊躇する」という、学生の責任感や他者への配慮が働いていると推察される。

5. 特定分野における実習体制の整備

小児、精神、ウィメンズヘルス、地域の各実習において、「どちらともいえない」との回答が(16%～21%)とやや多く見られた。これは、対象者の特性に応じたコミュニケーションの難しさや、各実習施設間における環境・指導の格差が生じたことによるものと考えられる。

2025年3月に卒業された皆様、調査にご協力していただき、心から感謝しております。今回の結果をより良い大学作りに向けて検討していく資料とし、教育活動や学生支援に役立てていきたいと思います。

今後の皆様の活躍を心から祈っております。なお、時々大学の方に足をお運び下さり成長した皆様方にお会いすることを教職員一同楽しみにしております。

2026年9月

学長戦略室「評価部門」

亀田医療大学卒業生就業状況について

対象：A 総合病院（看護部）

方法：インタビュー

日時：2026 年 4 月 3 日（金）

1. 2025 年 4 月期 新卒看護職員 就業状況

- 対象：新卒者 130 名
- 対象期間：2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

1) 退職者（離職率）

- 全体：130 名中 7 名退職（5.3%）
- 亀田医療大学卒業生：51 名中 2 名退職（3.9%）
日本看護協会の「2025 年病院看護実態調査」：離職率（8.4%～8.8%）
全国平均と比較して低い水準（3.9%～5.3%）で推移している。

2) 休職者（休職率）

- 全体：130 名中 11 名休職（8.4%）
- 亀田医療大学卒業生：51 名中 5 名休職（9.8%）

3) 退職・休職の理由（要因分析）

具体的な復職支援の事例として、主に以下の要因が考えられる。

- ① メンタル不調・健康管理：入職 5 日目から欠勤し、メンタル不調による退職に至る。
- ② 学生時代からの通院歴があり、不調時のセルフケアが困難であった。
- ③ 業務負荷（多重業務）：複数の患者を同時に受け持ち、優先順位を判断する「多重業務（マルチタスク）」の対人対応が困難であった。
- ④ 人間関係：病棟内でのコミュニケーションがうまく図れず、孤立感やストレスを抱えていた。

4) 年次別入職者の推移

入職年（入職者）	状 況
2025 年度（51 名）	全国平均より低く初期の定着支援が一定の効果を上げている。
2024 年度（56 名）	夜勤の自立や重症患者の受け持ちが増え、責任感による負担が増えている。
2023 年度（58 名）	教育担当やリーダー業務が始まり、将来への不安や転職を考える。
2022 年度（59 名）	奨学金返済の完了や、結婚・出産、専門性の追求によるキャリアチェンジを選択する。
2021 年度（50 名）	5 年間の勤務で確実なスキルが身につく、環境を変える、または専門性を追求して離職する割合が極めて高い。
2020 年度（58 名）	同上。COVID-19 の影響下で、負荷の増加により離職を検討した層が多い。
2019 年度（73 名）	7 年経過後の累積離職率。専門看護師・認定看護師への転換や、家庭優先の働き方への移行、転職など。
合計 405 名	

5) 適応支援の5つの柱と運用のポイント

- (1) 業務調整（受け持ち患者数の調整）
- (2) 指導体制の調整（チーム変更・指導者の変更）
- (3) 部署異動の検討
- (4) セルフサポートセンター受診
- (5) 復職支援プログラム（リワーク支援）

6) 新人看護師担当師長からのコメント

現在の新人看護師が抱える「技術習得の早さと、精神的なもろさの乖離」を明確に示している。特に日勤自立率の低下（前年比▲6.7%）と、10月以降の「自信喪失」という状況は、かなり体制にも影響する。

2. 2025年4月期 新卒看護職員の看護実践力の傾向

1) 技術面：習得は順調だが「応用力」と「環境」に課題

- (1) 基礎の習得は例年通り：9月までに日常業務の技術を概ねクリアしている点はポジティブなプロセスである。
- (2) 「型」からの脱却（思考の統合）：知識と技術が結びつかないのは、単なる能力ではなく、「指導時間の制約」という組織的な要因が問題である。振り返りやディスカッションの時間が不足している可能性が高い。

2) 自立状況：進捗の遅れと「認知」の歪み

- (1) 自立率 31.5%（昨年度より低下）：慎重な判断の結果とも取れるが、現場の負担感や指導によりリソースの枯渇が自立を遅らせている可能性がある。
- (2) 「責められている」という認知：10月以降、リアリティショックが深まる時期に、指導を「攻撃」や「否定」と捉えてしまう認知の偏り（歪み）が表面化している。これが「自信喪失」に直結し、休職・退職の引き金となっていると推察できる。

3) 大学側と共有すべき「情報の解像度」

抽象的な情報ではなく、以下のような具体的なプロファイルを共有できる体制を看護部は必要としている。但し、個人情報の擁護および共有すべき情報の限界を考慮して慎重に検討する。

(1) 健康管理のパターン（セルフケア能力）

既往歴や通院状況だけでなく、「不調の予兆（眠れなくなる、無口になる等）」と、それに対し学生自身がどう対処してきたかの履歴。

(2) 実習中における「つまずき」の特性

- ・ 多重業務（優先順位付け）への苦手意識の有無
- ・ 指導者からの指摘を「否定」と捉えやすい傾向（認知の癖）の有無

(3) サポートリソースの有無

家族の理解や、大学のカウンセラーとの接触頻度など、入職後も継続して活用できるリソースについて